

見る言葉

漫画家 里中 満智子

見る言葉

言葉そのものは、記録伝達手段にすぎない。だが、わたしたちは言葉によって考えを整理し、まとめ、そして伝える。言葉は人類が考え出した最大の発明品だ。だが「ないモノ」には、あてはめる言葉は創り出されない。モノも概念も、あってこそ初めて言葉があてはめられる。

愛、理想、美、勇気、博愛 e t c ……、あるからこそ言葉は生まれた。

打算、卑怯、残酷、憎、悪、これらもすべて、あるからこそ言葉が生まれた。人類は「言葉」という素晴らしい唯一無二の宝をもったが、どういふ言葉がこの世に存在するかで人類の本質もあらわさまになっている。いけないといふのではない。あからさまにしてこそわかることがある。「これを『悪』と名づけよう。」「そう決めたとき、人は」「こういふことはいくはない」とだ。だが存在する。これに立ち向かわなくてはいけない。「と心を引き締めた。(はずだ)」「悪」といふものを「な」として「し」にして「し」を「悪」はあはくなく「な」はひびきさすやせしむしけして

見えて、伝えなければ「悪」と立ち向かえない。

この世のすべての存在を、一つ一つ言葉に置き替えながら、人類は己を見つめ、心を育ててきた。わたしたちが今何気なく使っている言葉のすべてが、人類の歩みの上に築かれている。

わたしは絵と言葉の組み合わせで成り立っている漫画という表現手段を用いて物語を創っている。漫画の場合の「言葉」は、口に出して伝える「言語」ではなく、目で読む「文」だ。だから通常の話し言葉のふりをしながらキャラクターにしゃべらせてはいても、実は「読んだときに伝わる表現と配置」に気を配って書いている。「見る言葉」といつてもいい。現実の言語で「口調」にあたる部分は、せりふを囲む吹き出しの形や、キャラクターの表情で表現する。「読む、書く、伝える、記録する」に見える「も、言葉にはあるのだ。

